

## 表現の自由、ライシテの中のイスラム

前回 1989 年の中学生スカーフ停学事件を扱った。他宗教と異なり、フランスのイスラム「問題は、ムスリムに対する人格攻撃は人種差別や外国人排斥に相当し違法だが、イスラムという宗教に対する批判は位相を異にしていることである。神に抗して人権を勝ち取ってきたライシテの国フランスでは、宗教批判は表現の自由の範疇に属するが、人格の侮辱は法による処罰の対象となる」(伊達、144 頁)。そして、同書はムハンマドの風刺画がその典型例で描く側にとっては表現の自由だが、見る側のムスリムにとってはそうではないと続いている。

表現の自由に限らず、現代人の相互理解にはこの視点が歩み寄りの重要なポイントになるだろう。つまり描くこと(表現)は自由であっても、その使い方(配慮)の是非が問われるのだ。現代のフランスでは共和国の標語「自由・平等・博愛」のうち自由と平等が強くクローズアップされ、博愛だけが軽視されすぎているように思う。寛容、非寛容の視点も大事だが、他者を慮る博愛の精神を忘れていないかも大切だ。表現方法は自由だがそれを見聞きする人の気持ちを汲もうとせず、インターネットや公共の場で風刺画を拡散し、目にしないでおこうとする人まで傷つけている。しかし、表現者に罰をあたえるという発想は言語道断だ。神聖なものに対する侮辱など存在しない、それは神聖なものが存在しないからだというライシテの考え方に私は賛成だ。聖なるものがあるとすれば、それは人命であり人間が営む社会であり、いかなる宗教でもそれらの破壊を正当化できる教理的信仰的根拠は現代フランスでは存在しえない。風刺画やスカーフだけでなくどのような表現形態であっても、表現の自由とライシテのもとで共存を促進するための配慮の間に博愛の精神が必要であることは共通していると思う。

スカーフ事件後も続くライシテとイスラム関連の出来事についてごく一部だが数例挙げてみる。

- ・1990年3月19日、「フランス・イスラムの未来と組織について考える会(Conseil de réflexion sur l'organisation et l'avenir de l'Islam en France, CORIF)」創設。フランス在住のイスラム信者たちの教育、信仰、文化についての諮問機関。
- ・1995年1月10日、「フランス・イスラム代表者会議(Conseil représentatif des musulmans de France, CRMF)」承認。会議は共和国の価値観を守り過激派とは距離を取るとともに、国や地方自治体にはモスク建設やイスラム系学校の設立容認などを求めた。しかし、アルジェリア系パリ大モスクのダリル・ブバクルが率いるこの会議には、モロッコやチュニジア系のイスラム団体は賛同しなかった。
- ・2003年、フランス・イスラム評議会(Conseil français du culte musulman, CFCM)の創設。
- ・2004年3月15日、学校でのあからさまな宗教標章の着用を法律で禁止。
- ・2008年12月、バビルー(Baby loup)託児所解雇事件。育児休暇前までスカーフを着けて勤務していた女性が、休暇後にスカーフを理由に解雇された事件。破毀院で解雇は不当とされたが、その後パリ控訴院で逆転判決となった。
- ・2010年10月20日、公共スペースにおける顔全体を覆う服装(ブルカ、ニカブ)の禁止。

- ・2011年夏、パリ18区グットドール地区「路上の祈り」問題。クロード・ゲアン内相は路上の祈り禁止をほのめかしたが、警察とイスラム団体の間で交渉が成立した。
- ・2013年、学校にライシテ憲章の掲示。
- ・2016年、ビーチでのブルキニ着用に関して議論が起こる。
- ・2022年、グルノーブル市がブルキニでプールに入ることを認め議論が再燃。

以上の論争に加え、多くのテロ実行犯のイスラム過激派とのつながりが、イスラムに対する心証を悪くしている。1992年以降イスラム過激組織「武装イスラム集団(Groupe Islamique Armé)」がテロを本格化し、エールフランス機ハイジャック事件(1994年12月)、パリの地下鉄サンミッシェル駅爆弾テロ(1995年7月)、凱旋門駅爆弾テロ(同年8月)等を起こした。また2015年1月のシャルリエド襲撃事件、同11月のパリ同時多発テロ事件は世界中に大きな衝撃を与えた。2020年10月16日コンフラン・サント・オノリン(Conflans-Sainte-Honorine)の町で、中学校教師がムハンマドの風刺画を使った授業をしたことでイスラム過激派に殺害された事件は同稿でも扱った(2021年1月号参照)。マルセイユ、リヨン、ニースといった地方都市でもテロ事件は起きている。一連のテロが共和国とイスラムの宥和の妨げになっていることは間違いないだろう。

2003年、フランス・イスラム評議会がイスラム各団体と政府とのパイプ役を務める目的で創設され、21世紀のフランスにおけるイスラムの代表機関であったが、議長を選任などで紛糾することも多く、アルジェリアやモロッコ、トルコなど異なる派閥の主張の相違が影響し機能不全を引き起こした。現在この評議会は政府に対して影響力を失っており、2022年2月5日、フランス・イスラムフォーラム(Forum de l'Islam de France, FORIF)が立ち上げられ、評議会に代わる役割を期待されている。同様の組織が生まれては立ち消えを繰り返していることからライシテ下のイスラムの定着に苦心していることが窺える。

誤解のないように付け加えるが、1989年のスカーフ事件以降イスラムが表立って標的にされることが多くなったが、キリスト教にもライシテ問題は起こっている。クリスマスクレッシュ(キリスト生誕時の模型)を公道のクリスマス市場に展示しているのか、教会施設を修復するのに公金を投入できるのかなど議論は少なくない。筆者の住むリヨンでは、2005年にカトリックの聖エジディオ共同体が主催する平和の祈りが3日間大々的に催された。この会は毎年ヨーロッパを中心に各国で行われ、世界中の宗教団体が参加し世界の平和について考え祈る会であるが、その会に自治体から助成金が出た、つまり宗教団体主催行事に公金が使われたことで裁判になったという。聞いた話だと他国ではそのような問題は起こらないとのことであるから、これもまたフランスの宗教に対する見方が表れた一件と言えるだろう。

[参照インターネットサイト・参考文献]

(サイト閲覧は2022年8月24日)

『フランス革命以降のフランスにおけるライシテの時系列』(<https://www.vie-publique.fr/eclairage/20200-la-laicite-en-france-depuis-la-revolution-chronologie>)

公安調査庁『地域別テロ情勢等・フランス』

<https://www.moj.go.jp/psia/ITH/situation/europe/France.html>

伊達聖伸『ライシテから読む現代フランス』岩波新書、2018年。